

平成26年度和歌山県学習到達度調査
結果分析と指導のポイント

中学校 国語

平成27年2月



和歌山県教育委員会

1 出題のねらい

- ①当該学年の基礎的・基本的な知識・技能及びそれらを活用する力が身についているかをみるため、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕から出題した。
- ②「話すこと・聞くこと」について、第1学年では、話の構成を工夫したり場面や状況に応じて話したりする力、相手の言いたいことを確かめながら聞き取る力をみることをねらいとした。第2学年では、立場や考えの違いを踏まえて話す力、話し手の意図を的確に伝える上で効果的な資料・機器を選択する力をみることをねらいとした。
- ③「書くこと」について、第1学年では、集めた材料をもとに文章の構成や書こうとする事柄を考える力、根拠を明確にして文章を書く力をみることをねらいとした。第2学年では、読みやすい文章にするために推敲する力、自分の立場を明確にし、意見が効果的に伝わるように文章を書く力をみることをねらいとした。
- ④「読むこと」について、第1学年では、小説の登場人物の描写に注意して読む力、情景描写が作品にもたらす効果についてとらえる力をみることをねらいとした。第2学年では、表現から書き手の意図やものの感じ方を読みとる力、文章中の具体例が論の展開の中で果たしている役割をとらえる力をみることをねらいとした。
- ⑤〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕では、小学校学年別漢字配当表に示されている漢字を楷書で正しく整えて書く力や、小学校から当該学年11月までに学習したその他の常用漢字を正しく読む力を、また、第1学年では歴史的仮名遣い、第2学年では単語についての知識・理解をみることをねらいとした。

2 調査結果の概要

○漢字を読むこと等、基礎的・基本的な内容については、概ねできているが、文章中の情報を整理し、作品の構造をとらえて読むこと等に課題がみられる。

【第1学年】

□話すこと・聞くことの問題については、相当数の生徒ができている。

[③ (1)正答率 83.3% 無解答率 0.5%]

■登場人物などの描写に注意して読み、文章の内容を理解することに課題がみられる。

[④ (3)正答率 36.0% 無解答率 3.8%]

【第2学年】

□文章の構成を工夫したり、効果的に伝える工夫をしたりしながら意見を書くことについては、相当数の生徒ができている。

[⑤ (2) 観点1 正答率 85.2% 無解答率 11.0% 観点2 正答率 77.5% 無解答率11.0%]

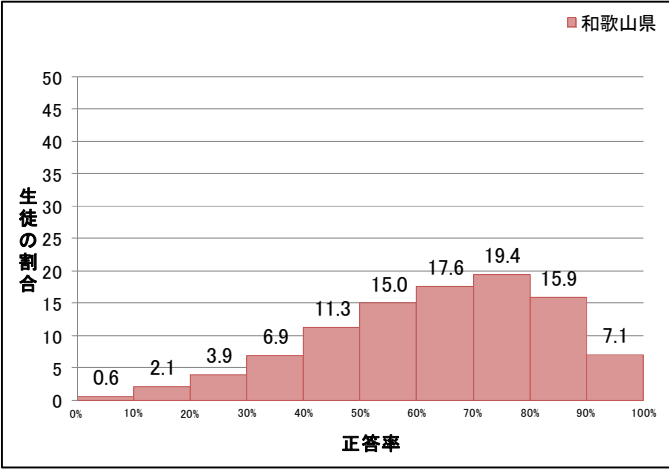
■各段落が文章全体の中で果たす役割や、文章に示されている書き手のものの見方や感じ方をとらえて読むことに課題がみられる。

[④ (2)正答率 32.1% 無解答率 1.9%]

中学校国語 第1学年

分類別正答率

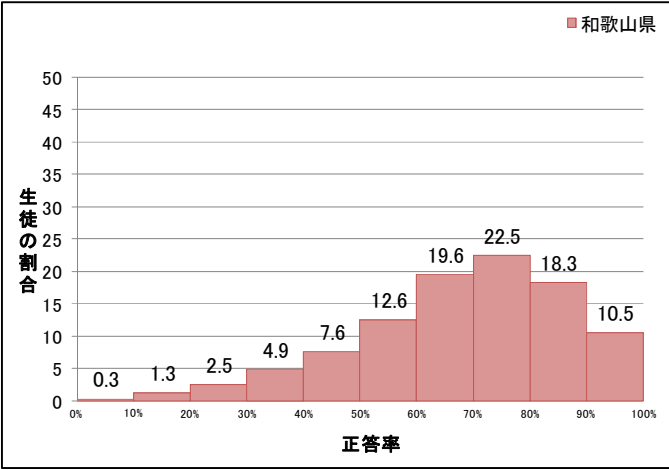
分類	区分	平均正答率(%)
		和歌山県
基礎活用	基礎	64.2
	活用	64.1
領域等	話すこと・聞くこと	77.5
	書くこと	61.3
	読むこと	52.1
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	70.0
観点	話す・聞く能力	77.5
	書く能力	61.3
	読む能力	52.1
	言語についての知識・理解・技能	70.0
問題形式	選択式	71.7
	短答式	62.2
	記述式	57.3



中学校国語 第2学年

分類別正答率

分類	区分	平均正答率(%)
		和歌山県
基礎活用	基礎	66.3
	活用	63.5
領域等	話すこと・聞くこと	76.1
	書くこと	80.1
	読むこと	40.5
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	74.4
観点	話す・聞く能力	76.1
	書く能力	80.1
	読む能力	40.5
	言語についての知識・理解・技能	74.4
問題形式	選択式	73.6
	短答式	59.9
	記述式	61.0



3 誤答例とその分析

○第1学年 正答率の低い問題にみられる誤答例とその分析（基礎・基本問題）

(1) 文章中、①「それぞれの鉢に合わせた水やりではなく、ホースでジャーツ」とありますが、それとは対照的な、主人公「おれ」の行動を表す一文が文章中にあります。その一文の最初の五字を抜き出して書きなさい。（読点も一字と数える。）

本文

4

次の文章を読んで、あとの(1)～(6)に答えなさい。
(1)～(20)は段落番号を表す。

内容領域・評価の観点	正答率	無解答率
文章の解釈・読む能力	44.4%	6.9%

主な誤答例	分析・考察、指導のポイント
<p>(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりと (P 5 下段 4 段落) ・なので、土 ・土がはねか (P 5 上段 1 段落) 	<p>分析・考察</p> <p>文章の内容理解を問う問題である。正答となる部分に着目できているにも関わらず、「一文の最初の五字」ではなく、途中から抜き出して解答したために誤りとなったものが多く見られた。また、「対照的」ということばの意味が分からず、題意を読み誤った生徒もいたようである。「主人公の行動を表す一文」という指示に留意し、本文中から主人公の行動を探す必要がある。</p> <p>指導のポイント</p> <p>生徒に口頭で答えさせる際、その発言内容だけでなく、答え方にもこだわって指導することが大切である。「一文をそのまま抜き出す」「一文の最初と最後の五字を抜き出す」「部分を抜き出す」など、意図的に発問を変え、時にはノートに書かせて確認してみるとよい。また、文と文を比べる学習を取り入れ、「同じ意味を表す文」「反対の意味を表す文」「言い換えの文」などを探しながら、作品の構造をとらえさせる必要がある。その際、普段から「対照的」「対応する」などのことばを用いて発問することで、題意の理解に役立てたい。</p>

○第1学年 正答率の低い問題にみられる誤答例とその分析（記述問題）

(3) 文章中、「花が咲いている！」とありますが、花が咲いたことに対し、主人公「おれ」が驚いているのはなぜですか。その理由を書きなさい。

本文

4

次の文章を読んで、あとの(1)～(6)に答えなさい。
(1)～(6)は段落番号を表す。

内容領域・評価の観点	正答率	無解答率
文章の解釈・読む能力	36.0%	3.8%

主な誤答例	分析・考察、指導のポイント
<p>(3) ・もう花は咲かないんじゃないかと思っていたから。 (P 5 下段 11 段落)</p> <p>・文末が「～から」などの理由を述べる文になっていない。</p>	<p>分析・考察</p> <p>傍線部②「花が咲いている！」の「！」で強調されている事柄に注目し、主人公の心情の背景についてまとめる問題である。まず、ペチュニアの花について説明しているのが 11 段落であり、傍線部②「花が咲いている！」に対応する部分が、「それがちゃんと花が咲いたのだ。あの粉みたいなタネが、ついに花を咲かせたのだ。」であることをとらえる。次に、「それ」という指示語が、「正直いって、もう花は咲かないんじゃないかと思っていた。タネから育てて本葉まで育っただけで上等だと、そんなふうになんとかあきらめていた。」という2文を指すことをとらえ、この部分をまとめる。「あきらめていたのに、花が咲いた」という驚きが、「！」で表現されていることを読み取り、解答する必要がある。</p> <p>指導のポイント</p> <p>発問を行う際、生徒が文章を手掛かりとせず自分のことばで答えていても、その内容がおおまかに正解をとらえていれば、良しとしてしまいがちである。文章を丹念に読み、解答の根拠を常に本文に求めることや、解答が果たしてその部分だけでよいのか、「問い」の内容に戻り確認することを習慣づけたい。また、登場人物の心情等に注意しながら読みを深めるために、「！」や「…」などの記号にも着目し、発問に取り入れていきたい。</p>

○第2学年 正答率の低い問題にみられる誤答例とその分析（基礎・基本問題）

(2)

①～⑨の形式段落を三つのまとまりに分ける時、二つ目のまとまりは何段落から何段落になりますか。その段落番号を書きなさい。

本文

4

次の文章を読んで、あとの(1)～(6)に答えなさい。
(①～⑨は段落番号を表す。)

内容領域・評価の観点	正答率	無解答率
文章の構成・読む能力	32.1%	1.9%

主な誤答例	分析・考察、指導のポイント
<p>(2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・②～⑦ ・③～⑦ 	<p>分析・考察</p> <p>各段落が果たす役割を考えながら、まとまりをとらえる問題である。②～⑦や、③～⑦という誤答が多くみられたが、①段落に「十代の頃抱いた不思議な感覚」という記述があるため、僕の経験であるヒグマの例と数年前友人が話したザトウクジラの例を同じまとまりとしてとらえることはできない。正答は、1つ目…僕の経験、2つ目…友人の経験、3つ目…まとめといった段落分けとなる。</p> <p>指導のポイント</p> <p>段落分けは、短く作品の構造がつかみやすい文章を使って練習させるとよい。キーワードを探す→最も大切な部分や文を探す→それぞれの段落の要点（小見出し）を短くまとめる→意味のまとまりごとに分けるなど、作品の構造をつかむための手順を、生徒の学習段階に応じたスモールステップで丁寧に教えていくことが大切である。また、接続語の働きや指示語にも留意しながら、段落相互の関係やそれぞれの段落が果たす役割についてとらえさせていく必要がある。「平成25年度 和歌山県学習到達度調査 結果分析と指導のポイント 中学校 国語」にも指導事例が記載されているので、参考にしてほしい。</p>

○第2学年 正答率の低い問題にみられる誤答例とその分析（活用問題）

(6) **9** 段落には、「僕」の、友人に対するどのような願いが込められていますか。文章中から読み取れる「僕」の考えを踏まえて、三十字以上、四十字以内で書きなさい。（句読点も一字と数える。）

本文

4

次の文章を読んで、あとの(1)～(6)に答えなさい。
1～**9**は段落番号を表す。

内容領域・評価の観点	正答率	無解答率
文章に表れているものの見方や考え方・読む能力	19.9%	26.4%

主な誤答例	分析・考察、指導のポイント
<p>(6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「願い」が書けていない。 ・悠久の自然について思いをはせる内容が書けていない。 ・本文の記述を踏まえて書けていない。 	<p>分析・考察</p> <p>書き手の感じ方や考え方を問う問題である。『僕』の友人に対するどのような『願い』が込められているか」という問いより、友人が登場する5段落以降から、「僕」の思いや考えが書かれている部分を探し、「願い」の形になるように記述すればよいことが分かる。文章中に、そのまま解答にできる「願い」の形として書かれた部分がないため、戸惑った生徒も多くいたのではないと思われる。忙しい日々を送っている友人への願いは、「クジラを忘れないで過ごしてほしい」ということである。「僕」の思いや考えは7・8段落にまとめられているので、ここから「クジラ」が象徴しているもの（＝悠久の自然）について読み取り、整理するとよい。</p> <p>指導のポイント</p> <p>長い文章の中から解答となる部分を探すためには、まず、題意や作品の内容をとらえ、手掛かりを得る必要がある。問いを丁寧に読んで留意点やヒントを分析する力や、前ページ4（2）指導のポイントを参考に、作品の構造をとらえる力を身に付けさせたい。また、読み取った情報を整理し、取捨選択しながらまとめる力を身に付けさせるため、そのような学習活動を取り入れた発問を工夫することが大切になる。</p>

生徒の実態を把握し、指導・支援につなぐために

国語科の指導内容は、系統的・段階的につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている。ここでは、中学校国語の結果分析と指導のポイントを踏まえ、「読むこと」の領域における生徒のつまずきへの気づきや指導・支援について解説する。

なお、この解説は、すべての授業の前提となるものであり、特別な支援を必要とする生徒だけのものではない。また、この解説はあくまで一例であるため、実際の指導では、生徒一人一人のできることやつまずきを丁寧に見極め、その実態に応じた手立てを一つ一つ考えていく必要がある。

指導事例について

今回の到達度調査を通して、第1、2学年ともに「読む能力」に課題が見られた。

第1学年については、特に、大問4(1)(3)(4)(5)の正答率が低くなっている。

これらの問題はすべて、学習指導要領C「読むこと」の指導事項ウ「場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。」の定着を確認するために出題した。

第1学年の課題は、次の3点に見られる。

- ①題意をとらえ、問題文の指示を踏まえて解答すること。
- ②言葉を手掛かりにしながら文脈をたどり、視点を定めて読むこと。
- ③描写に注意しながら、登場人物の心情等について読みを深めること。

続いて第2学年では、特に、大問4(2)(3)(5)(6)の正答率が低くなっている。

これらの問題は、(2)(3)(5)については、学習指導要領C「読むこと」の指導事項イ「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。」、(6)については、指導事項エ「文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと。」の定着を確認するために出題した。なお、この指導事項イは、第1学年の指導事項ウを受けて示されたものである。

第2学年の課題は、次の3点に見られる。

- ①構成に着目して文章を解釈すること。
- ②各段落が文章全体の中で果たす役割をとらえること。
- ③文章中に示されている具体的な例が書き手の論の展開の中で果たす役割を考えること。

また、今回、直接ねらいとした出題内容ではないが、指導事項ウにあたる「文章の構成や展開、表現の仕方について分析するだけでなく、そのような表現をした書き手の目的や意図を考えたり、その効果について考えたりすること。」にも課題が見られた。

さらに、第1、2学年ともに、解答を作成する際に次の課題が見られた。

- ①取りだした情報を分類したり、取捨選択したり、整理したりすること。
- ②集めた情報を比較、検討しながら自分の考えをまとめること。
- ③根拠を明確にすること。

以上により、子どもたちにさまざまな課題が見られたが、今回はその中でも、「文章中から必要な情報を読み取って、整理したり比較したりしながら、内容をとらえる力」と、「各段落や具体例が文章中で果たす役割を踏まえて、文章全体の構成をとらえる力」を身に付けさせることに重点をおいた指導事例を紹介したい。

第1、2学年ともに同じ新聞記事を使用し、それぞれの学習内容に基づいた指導事例を考えた。他の新聞記事でも応用が可能であり、気軽に活用できる。生徒の学習段階に応じて1～3時間で展開したり、学習活動をいくつか取り出して10分程度で展開したりと、先生方のアレンジを加えて展開してほしい。

【生徒の実態を把握し、指導・支援につなぐために】

図1は、読んで解釈する過程のモデルを示したものです。普段はあまり意識されてはいないかもしれませんが、「読むこと」は、初めに「文字・単語を読む段階」を経て、「文章を解釈する段階」に到達します。生徒のつまずきとしては、「促音、拗音などの特殊音節の読み方に間違いが多い」「逐次読みになる」「単語や文節を正しく区切って読むことが難しい」などの様子が見られることがあります。生徒への指導・支援を考える際、一人一人の生徒がどの段階でつまずいているか、どこまで達成しているかを理解していくことが大切です。ここでは、読んで解釈する過程の段階ごとに指導・支援の例を示していきます。

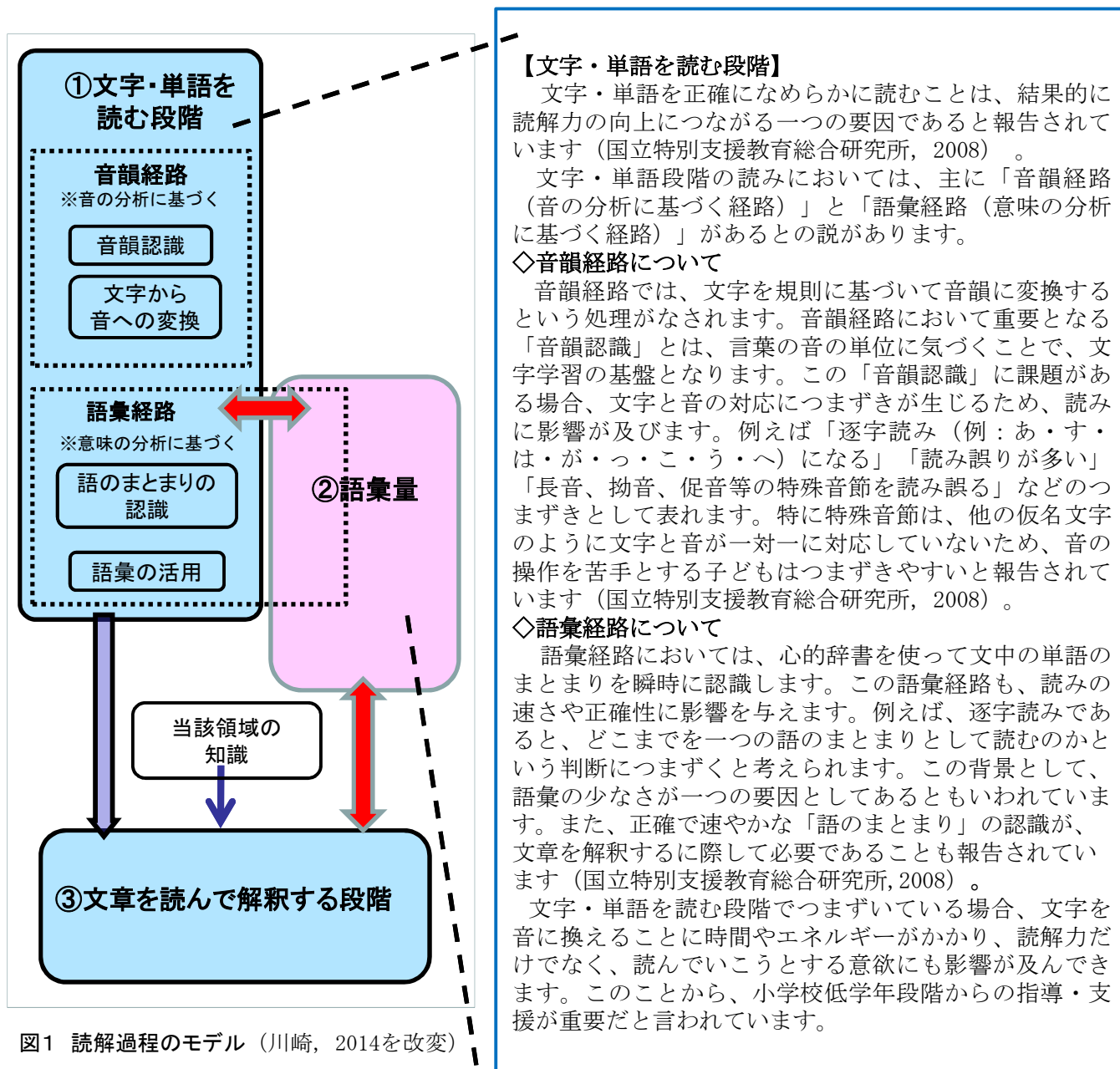


図1 読解過程のモデル（川崎，2014を改変）

【語彙量の読みへの影響について】

読解に至るまでの読みの過程において、語彙は重要な役割を担っています。高橋（2001）は、学童期において、語彙量は読解力を規定する要素であり続け、しかも学童期の語彙は、前年の調査時期の読解力によっても説明されるものであったと述べています。そして、このことは子ども達の語彙量と読解力が相互的な関係にあることを示すものになると報告されています。

「読む」力を育むためには、小学校低学年段階から語彙を豊かに育む取組を継続することが重要と考えられます。

【指導・支援の例】

ここでは、図1に示したそれぞれの段階における指導・支援の一つの例を挙げます。



指導のポイント

楽しみながら

達成感を得て

自信や意欲を高められるように

【①文字・単語を読む段階の指導・支援の例】

正確になめらかに読む力の向上が、ひいては読解力の向上につながることから、文字を音に変換することへの手立てや、まとまりとして捉えられる語を増やす手立てを小学校低学年段階から行っていくことが大切だと言われています(国立特別支援教育総合研究所, 2008)。

◇読みに時間がかかる場合、子どもの実態に合わせた情報を提供する(文部科学省, 2013)。

- 漢字に振り仮名をつける。
- 範読の後、生徒に追読みをさせる。
- 音声やコンピューターの読み上げを聞かせる。
- 文字のサイズを読みやすい大きさにする。

文字を音声化することに多大なエネルギーを費やす場合には、必ずしも音読にこだわらないことも大切になります。

◇中学校段階では、歴史的仮名遣いの音読につまづきが表れることもあるので配慮する。

- 読み方の表記(大きさ、ひらがな等)を工夫する。

◇文中の「語のまとまり」を認識しやすいようにする。

- 事前に意味のあるまとまりを視覚的に(単語ごと、もしくは文節ごとに横線を引く・分ち書きにする等)つくっておく。
- 文意に関係のある絵を示す。
- 語彙を豊かに育てる取組を継続する(下欄参照)。

※小学校学習指導要領では、低学年のうちから「読むこと」において、語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読や朗読を繰り返し、指導することが示されています。中学校でもそれを踏まえた指導を行うことが大切です。

【②豊かな語彙を育むための指導・支援の例】

◇話や文章の中の語彙について関心をもたせる。

- 事象や行為など、具体的で身近な事柄を表す語句の使用から、抽象的な概念を表す語句へと段階的に理解を広げる。
- 心情を表す語句は具体的な体験と関連づけ、意味理解を深める。
- 言葉集めなどを通して、類義語や対義語など、多くの語彙を獲得する。→辞書を活用する場面を増やす。
- 調査の問いに用いられるような語句(例:「対照的」「対応」等)についても、授業場面で適宜使うようにする。

◇教科を横断した指導をする。

- 学んだ言葉を他教科等の学習や学校教育活動全体に関連させる工夫を図る。

【③解釈の段階における指導・支援の例】

◇文章の内容を理解する。

- 書かれている内容から事実と感想、意見を理解する。
- 文学的な文章を読む際には、視点を定め、登場人物の内面や心情をとらえるようにする。
- 説明文の指導については、第2学年(基礎・基本問題)指導のポイント(pp6~7)を参照のこと。

◇表現の工夫について理解する。

- 比喻や反復など表現の工夫に気づき、文脈の中で表現している内容について必要に応じて解説する。

〈参考文献〉

- ・川崎聡大・奥村智人・中西誠他(2014)「学習到達度や読解力の向上を目標とした言語指導を可能にする評価システムの構築—新たな読解モデルの構築—」『日本コミュニケーション障害学会学術講演会予稿集』(40), p. 74
- ・国立特別支援教育総合研究所(2008)「通常の学級におけるつまづきのある子どもへの多層指導モデル(MIM)開発に関する研究」平成18~20年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(A))研究成果報告書
- ・国立特別支援教育総合研究所(2013)「LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド」
- ・高橋登(2001)「学童期における読解能力の発達過程—1-5年生の縦断的な分析—」『教育心理学研究』第49巻 pp. 1-10
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2013)『教育支援資料—障害のある子供の就学手続と早期からの一貫した支援の充実—』

第1学年の指導に向けて

付けたい力：文章中から必要な情報を読み取って、整理したり比較したりしながら、内容をとらえる力。
 指導事例：同じテーマについて書かれた二社の新聞記事を読み比べ、記事の内容の違いについてまとめる。

教材 「国語に関する世論調査」について書かれた二社の新聞記事

生徒の学習活動

学習活動1：【記事A】【記事B】を読み、それぞれ序論・本論・結論に分ける。

学習活動2：【記事A】【記事B】で「国語に関する世論調査」の結果について述べられている部分を見つけ、箇条書きでまとめる。

例 「国語に関する世論調査」結果について

【記事A】	【記事B】
<ul style="list-style-type: none"> ・「煮詰まる」4割の人が誤用。 ・「世間ずれ」正しく使っている人が3割。 ・「まんじりともせず」半数の人が誤用。 ・「敬語」不適切だったり、ふさわしくなかったりする表現に気づく人が増えている。 ・謙譲語を尊敬語と間違える。 ⋮ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「相手や場面に合わせて態度を変える」10代後半63.4%、20代68.7%、30代以降、年をとるに従い低下。 ・「態度を変える方が好ましい」20代以外では1割～3割台、20代では約半数。 ・「いつも同じ態度でいる方が好ましい」を上回る。 ⋮

学習活動3：学習活動2で整理した情報をもとに、【記事A】と【記事B】を比べ、その違いについて、意見を交流する。



【記事A】の方が、世論調査の結果についてたくさん述べているね。

【記事A】は、言葉の使い方に、【記事B】は、態度に注目しているよ。



調査結果について注目している点が変わるのはどうしてだろう？

学習活動4：【記事A】【記事B】の違いについて、文章にまとめる。

まとめ方の例

二つは共に、(①) についての記事だが、【記事A】は (②) を伝えるため、(③) に注目しており、【記事B】は (④) を伝えるため、(⑤) に注目している。

※ 完成した文章を互いに読ませ合い、() に記入した内容や文の接続が適切であることを確かめさせたり、他のまとめ方を考えさせたりして、内容を的確にとらえる力を身に付けさせていくことが大切である。

学習活動1の手立て

- ・分からない語を、辞書で調べさせる。また、類義語や対義語、他の文章における使われ方などを確認させる。
- ・接続語の働きや指示語にも留意させながら、段落相互の関係を正しく押さえさせる。

学習活動2の手立て

- ・該当する部分に線を引いて確かめさせる。

学習活動3の手立て

- ・記事に示された情報の違いから、記事の主張する内容が異なることに気付かせる。

学習活動4の手立て

- ・学習活動2で抜き出した内容を簡潔に表現している部分を探させ、線を引かせる。(記入例③・⑤を参照)
- ・主張にあたる部分を探させ、線を引かせる。(記入例②・④を参照)
- ・「まとめ方の例」を使って文章にまとめさせる等、生徒の学習段階に応じた学習活動に取り組ませる。

【 記入例 】


- ① 文化庁が公表した 2013 年度「国語に関する世論調査」の結果
- ② 意図を正しく伝えるため、言葉を場面に応じて用いる心配りが必要であること
- ③ 本来の意味とは異なることを知らずに、誤った使い方をしている言葉
- ④ 議論を戦わせる力の養成を社会全体の課題として考えたいこと
- ⑤ 対人関係で波風を立てない最近の若者の傾向

第2学年の指導に向けて

付けたい力：各段落や具体例が文章中で果たす役割を踏まえて、文章全体の構成をとらえる力。
 指導事例：読み取った文章の記述を根拠にしながら、意味段落のまとまりを考える。

教材 「国語に関する世論調査」について書かれた新聞記事【記事A】

生徒の学習活動 ※  は学習の手立て。

学習活動1：【記事A】の形式段落に番号をつける。
 【記事A】を読み、例にあたる部分は  で囲み、筆者の意見にあたる部分には線を引く。
 （第1学年C読むこと（1）イの指導事項にあたる。）

【語彙を広げる】

例示されている言葉の意味を確かめさせる。
 (例)「煮詰まる」
 「いただく」
 慣用句や敬語について、以前に学習した内容を想起させる。

例

第②段落（例にあたる部分）

例えば・・・使用している。

第⑩段落（筆者の意見にあたる部分）

若者の間では…必要だ。

【文法の理解】

助詞に着目させ、その意味や働きを確かめさせる。
 (例)「若者の間では」と「若者の間で」の表現の違いを考えさせる。

学習活動2：【記事A】は、いくつの意味段落に分けることができるか、学習活動1で読み取った内容を手がかりにしながら考え、自分の意見をもつ。

【段落相互の関係をとらえる】

「例えば」等の接続語に注目させ、その働きを確かめさせる。

学習活動3：どのような段落分けが最も適切であるか、記事の記述を根拠にしながら、学級全体で話し合う。

生徒の意見を板書した例

- | | |
|---|---------------|
| ① | 問いかげ（問題提起） |
| ② | 例 「煮詰まる」 |
| ③ | 国語に関する世論調査結果 |
| ④ | 例 「世間ずれ」 |
| ⑤ | 例 「まんじりともせず」 |
| ⑥ | 正しい意味を知るきっかけに |
| ⑦ | 文化庁は啓発を |
| ⑧ | 敬語の使い方 |
| ⑨ | 例 謙譲語 |
| ⑩ | 若年層 敬語重視 |
| ⑪ | 「る」「する」 |
| ⑫ | 例 「チンする」 |
| ⑬ | 例 「サボる」… |
| ⑭ | 例 「デイスる」… |
| ⑮ | 言葉は変化する |
| ⑯ | 場面に応じて用いる心配り |

【段落のまとまりを考えよう】

【構成をとらえる】

各段落の内容についての生徒の意見を板書し、具体例と意見のつながり等を視覚的に示すことで、文章全体の構成を意識させる。
 ※ 学級全体で意見を共有できるように工夫する。

「ないだろうか」という表現からわかるように、形式段落①は読者に問いかける内容になっています。形式段落②は、文章の初めに「例えば」とあって、例を示しているので①と②の間を区切りました。



⑪から⑭は「る」「する」をつけた言葉の例として、1つにまとめられると思います。



最後の段落に筆者の主張がある尾括型の文章なので、大きく2つにまとめられます。



※ 最後に、記事を要約させる活動を取り入れると、生徒の学習状況を確認できる。その際、ねらいに応じて、設定する字数の条件を変えるとよい。生徒は、短い字数でまとめることで筆者の主張に迫ったり、長い字数でまとめることでそれぞれの段落の要点を確認したりできる。構成に着目しながら文章を解釈する力を身に付けさせていくことが大切である。

4 授業改善の視点

○中学校国語における授業改善のための視点

(1) 国語の基礎的な事項の習得・定着に向けて

漢字や語彙、文法事項など、国語の基礎的な事項を習得し定着させるために、教師は日々の授業の中で、その時間に使用する教材文と関連づけながら、国語の基礎的な事項を繰り返し取り扱い、積み重ねていくことが必要になります。前掲の指導事例では、第1学年の〔学習活動1の手立て〕にある「分からない語を辞書で調べる」「類義語や対義語を確認する」、第2学年の【文法の理解】(助詞「は」が果たす役割や意味)や【語彙を広げる】(慣用句)がこれにあたります。

また、「一文をそのまま抜き出す」、「一文の最初と最後の5字を抜き出す」などの答え方をはじめ、前掲の「指導のポイント」にて示されている事項についても、教師が日々の授業の中で生徒に取り組みせる時間を確保し、繰り返し指導することが大切です。到達度調査や定期考査で「問い」や「指示」に生徒は答えますが、これは、授業で生徒が「問われていることは何か」を正確に把握し、「指示」に沿って的確に答えることと同じ活動であり、ひいては、適切に表現し正確に理解する能力の育成につながります。そのためにも、教師は発問や指示を熟考し、評価規準を明確に持って授業を展開する必要があります。

(2) 生徒が身に付けてきた力の活用に向けて

『中学校学習指導要領解説 国語編』では、「学習の系統性の重視」として、螺旋的・反復的に繰り返しながら国語科の指導内容について学習し、能力の定着を図ることが述べられています。また、前後の学年を考慮した弾力的な指導の必要性や、小学校における指導内容についての配慮の大切さが示されています。

これを踏まえて、日々の授業では、生徒がこれまでに身に付けた力を活用できるように、教師はその時間を確保し、指導する必要があります。例えば、前掲の指導事例では、第2学年の「学習活動1」や欄外の※にある「筆者の主張を要約すること」は、第1学年〔C 読むこと〕の(1)指導事項のイの内容が含まれていますが、これらを授業で取り扱う時に、教師が正答を説明して終わりとするのではなく、生徒がその活動に取り組むことで繰り返し学習できるような授業展開が望まれます。

(3) 指導事項や学習活動の明確化、効果的な指導に向けて

上記(1)及び(2)を実践していくためには、授業を計画する際に、指導したいことが多岐にわたり、指導のポイントが分かりづらくなることや、その授業でねらっていることがあいまいなために、生徒が何を学んだかが分からない状況に陥ることが無いようにする必要があります。そのために、1時間の授業における指導事項や学習活動を明確にすること、単元や年間を通して効果的な指導ができるように教師が授業運営を行うことが大切です。

〈授業改善に関する参考資料〉

- ・和歌山の教育 基礎・基本

(<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/h24/kyouikukisokihon.pdf>)

- ・どの子ども「わかる・できる」授業づくりのアイデア

(<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/wakarudekiru/wakarudekiru.html>)